

かわさきしがいこくじんしみんだいひょうしゃかいぎ
川崎市外国人市民代表者会議

だい 10 期 だい 2 年 だい 1 回 だい 1 にち
(第 10 期 第 2 年 第 1 回 第 1 日)

ぎじろく
議事録

1 日時 2015 (平成 27) 年 4 月 26 日 (日) 午後 2 時 ~ 5 時

2 場所 川崎市国際交流センター

3 出席者

(1) 代表者 24 人

張 氷青、葉 元聡、任 家林、劉 健全、王 夕心、金 スンオグ、孔
敏淑、崔 想、河 相宇、ヴィラマー ジェリー、タカハシ ライゼール
ラモス、牟 鳳菊、グエン ゴク バオ リン、ヘイ ジャ フィ、仲田
シリワン、ケゼングア エドワード、セヌー ジョアキム、バルトコバ
オクサナ、園田 泉 ベアトリス、河本 ファビオ 良則、シフケン
ブランドン、オルソン チャールズ、童 堉恆

(2) 事務局

石川 室長、町田 担当課長、ながさわ 担当課長、おおた 担当課長、すどう 課長
補佐、おざわ 担当係長、まるはし 職員、すがわら 職員、たかはし 専門調査員

4 傍聴者 12 人

5 会議次第 (公開)

(1) 開会のあいさつ

(2) 事務局説明

(3) 議事

(4) 事務連絡

(5) 閉会

【全体会】

セヌー委員長「それでは、これから川崎市外国人市民代表者会議、2015 年度第
1 回第 1 日を開催する。今日は、鈴木イエレナさんとヒラチャン・アスカさ

んから欠席の連絡が届いている。本日の応援職員の紹介を事務局から願うする。」

(事務局須藤課長補佐が紹介。)

セヌー委員長「事務局から職員の交代について願うする。」

(事務局石川室長が紹介。)

セヌー委員長「今日の日程と配付資料について説明を願うする。」

(事務局須藤課長補佐が説明。)

セヌー委員長「続いて、前回会議のまとめについて説明を願うする。」

(事務局高橋専門調査員が説明。)

セヌー委員長「議事に入る前に、市長報告について報告する。4月20日に私と副委員長と福祉教育部会長代理のエドワードさんと社会生活部会長の任さんで、市長への報告を行った。市長報告の後には、記者会見もあった。市長との交流は非常に有意義なものだった。印象に残ったこととしては、我々が話し合っているなかで提言にはならなかったものについても積極的に市の中で検討し、実現できるものがあれば積極的に実現したいという話があった。また、みなさんと交流もしたいという話もあった。副委員長から補足はあるか。」

オルソン副委員長「報告では、今までの審議のテーマの紹介と我々が参加したイベントやそれぞれの委員の活動についても紹介した。オープン会議とフィールドワークの内容についても報告をした。」

セヌー委員長「それでは、議事に入る。まずは川崎市の審議会等委員についてだ。資料2を参考にして考えてもらいたい。成人式実行委員会の委員をやりたい人はいるか。(なし)できれば、王さんはすでに3回やっているのだから新しい人はいないか。この中で一番若いヘイ・ジャフィさんはどうだろうか。」

ヘイ委員「私は、かわさき市民祭りの実行委員会の方をやるかと考えていたのだが、もし誰もいないのならば引き受けたい。」

(拍手)

セヌー委員長「続いて、かわさき市民祭り実行委員会の委員をやりたいという人はいるか。」

河本委員「会議の時間が平日の午前ということだが、事前に日程がわかるのであれば参加したい。」

(拍手)

セヌー委員長「続いて、川崎市国際交流センター活用推進検討委員会についてだが、事務局から補足の説明がある。」

事務局須藤課長補佐「昨年、園田さんがこの検討委員会の委員だったが、国際交流センター側の事情で昨年度は会議が開催できなかった。センターから、引き続き園田さんをお願いしたいという意向を聞いている。」

園田部会長「みなさんがよろしければ、今年もぜひ引き受けたい。」

(拍手)

セヌー委員長「市の審議会等委員については、成人式実行委員会がヘイさん、かわさき市民祭り実行委員会が河本さん、国際交流センター活用推進検討委員会が園田さんに決めた。次に実行委員会等について決めたい。事務局から説明をお願いします。」

(事務局高橋専門調査員が資料3に基づき説明。)

セヌー委員長「それでは、順番に希望をとるので希望する実行委員会に手を挙げてください。(順番に挙手 → バランスをみて調整)」

事務局高橋専門調査員「欠席の方が2人いるので、後で事務局が希望を聞いておく。人数のバランスを考えて再調整が必要になるかもしれないので、今日は仮決定ということでよいか。(異議なし)」

セヌー委員長「次は行事への参加について審議する。2015年度の各行事への参加についてだ。事務局から説明をお願いします。」

(事務局須藤課長補佐が資料4に基づき説明。)

セヌー委員長「何か意見や質問はあるか。」

劉委員「スケジュールを見ると市民祭りと多文化フェスタさいわいが11月にある。

11月はオープン会議もあるので、みなさん大変なのではないか。どちらか1つの参加にしてはどうだろうか。」

河委員「代表者会議のPRということでイベントへ参加していると思うが、今日の資料にもあるように認知度は2割ぐらいのようだ。もっと効果的なイベントがあれば、そちらに参加してみてもよいのではないか。」

仲田委員「残念だが、今年度は多文化フェスタさいわいに参加するのは日程的に難しいと思う。」

セヌー委員長「それでは、かわさき市民祭りとインターナショナル・フェスティバルの2つに参加することに賛成の人は手を挙げてください。

(賛成多数) それでは、今年度は市民祭りとインターナショナル・

フェスティバルに参加し、多文化フェスタさいわいには参加しないことになった。続いて、臨時会の企画案についてだ。事務局から説明をお願いする。」

(事務局高橋専門調査員が資料5に基づき説明。)

セヌー委員長「まずは、臨時会をオープン会議とするかどうかについて決めたい。何か意見はあるか。(なし)オープン会議とすることに賛成の人は手を挙げてください。(全員賛成)それでは、臨時会はオープン会議とする。次に会議の時間だが、いつもは2時から5時で開催している。オープン会議の振り返りのなかでは時間が短いという意見も多かった。」

劉委員「国際交流センターは場所のアクセスがあまりよくないので、個人的には時間を延ばすことはふさわしくないとと思う。」

園田部会長「場所のアクセスが不便という意見だが、私が参加した講座などでは参加者も多い。結局、大切なのは魅力的な内容かどうかということではないか。時間は長くすればよいうというわけではないので、3時間でよいと思う。」

セヌー委員長「会議の時間を長くしたいという人は手を挙げてください。(賛成0)では、時間は従来と同じ3時間とする。それでは、部会審議に移る。」

【福祉教育部会】

園田部会長「今日は時間が少ないので、時間配分のペースを守って進めたい。まずは前回の確認を事務局からお願いする。」

(事務局高橋専門調査員が資料1に基づき説明。)

園田部会長「では、次に母語・母文化について事務局から資料説明をお願いする。」

(事務局高橋専門調査員が資料6-1に基づき説明。)

園田部会長「今までもいろいろと母語・母文化の重要性については話し合われてきたが、やはりできるだけ子どものサポートが必要だと思う。今は学校のなかでも外国人がいることは当たり前になってきている。日本で生まれ、育てている子どもたちも多い。もちろん、小学生や中学生のときにいろいろな事情で日本に来るケースもある。日本で育っていく以上は、当然、日本語も学ぶ必要がある。ただ、これを提言にするということを見ると難しい気もするが、みなさんの意見はどうか。」

仲田委員「私の子どもは小さく、タイ語は少し話せるが、多分、本当は興味がない

い。」

園田部長「資料でも『誰が』ということでまとめてあるが、親は子どもにルーツを受け継いでほしくても、子どもたちのなかにはそれを否定する子どももいる。日本で育つなかで『日本人になりたい』という気持ちが強い子もいる。だから、子どもが学びたいのか、親が学ばせたいのか、はすごく重要な違いだと思う。子どもたちが学びたいと思ったら、学ばせてあげたいが、無理やり教えようとするのはどうなのだろうか。そのあたりがすごく難しい課題だと思う。」

河本委員「母語については、多分、家庭で力を入れないとだめだと思う。僕が小さいときに、お母さん、お父さんに毎日『日本語を教えてよ』と言ったが、お父さんは「いい、大丈夫。将来、絶対に日本に行かないから必要ないよ」と言って教えてくれなかった。25年たって日本に来ることになって、『全然しゃべれないから困るよ』と言われた。実際、日本に来たときにはあいさつ程度しかできなくて苦労したので、家庭で教えないとだめだと思う。」

バルトコバ委員「河本さんに賛成だ。私は言語を話せるということは、必ずプラスだと思う。たしかに、園田さんが言ったように子どもが覚える気があるのかどうかということはあるが、私は子どもには言葉を覚えてほしい。でも、夫は日本人なので私が母国語で話していると『なぜ母国語で教えているのか』と言われることもある。将来、どこかの学校に通わせることができるなら、通わせたいと思っている。」

金委員「私自身は母語・母文化に対して、やはり自分のルーツを知りたいと思ったときに、日本語か朝鮮語かというのが初めから価値づけされてしまっているの嫌な部分がある。だから、子どもが自分自身のことを知りたいと思ったときに、情報をなるべく平等に提供してくれる場所なり何かがあればよいと思う。私としては学校の先生でも、図書館の人でも、公的機関の人でも誰でもよいのだが、ルーツについて学びたいと思ったときに、学ぼうとすれば学べるということを教えてくれる人がほしかった。それは朝鮮籍だからかもしれないが、最初から価値づけされた否定的なイメージではなく、なぜ、こういった理由や経緯で日本にいるのかということが公平な立場から知る機会があると違うと思う。」

事務局高橋専門調査員「(母語・母文化についてのこれまでの代表者会議での議論と市民自主学級・市民自主企画事業について紹介)もし、みなさんが重要なことだから提言にしたいと思うなら、どうしたいのかというのを、もうちょっと

具体的に教えていただけるとよいと思う。」

仲田委員「私は、今は麻生区と多摩区の子育て広場に参加している。その経験から言うと、毎年、企画案を出さなければいけないのだが、外国人だけのグループではそれが難しい。もう少し外国人のグループでもエントリーしやすくなるようなサポートがほしい。」

ケゼングア委員「みなさん子どもが興味を持ったときに勧めるのがよいと言っていたが、実際問題としては、私の家庭の場合は小っちゃい子どもがいるが日本に長く住んでいて、周りもみんな日本人で、学校へ行っても日本語だ。となると、子どもたちが積極的に興味をもって言語を学ぼうというふうにはならない。個人的には、子どもたちが自分のルーツに興味をもつためのきっかけとなる環境づくりを考えなければいけないのではないかと思う。たとえば、いろいろなクラスにいる子どもたちのことを紹介して、活躍するような場をつくるか。そうすれば、子どもたちも自分のルーツに興味や自信を持てるようになるのではないだろうか。」

園田部会長「たとえば学校の国際理解教室などで、そういったことができると思う。子どもたちがself esteem（自尊心）を持ったり、みんなに尊敬されたりするというのはすごく大事なことだと思う。それに、それは子どもだけではなく、大人にとっても大事なことだ。」

ヘイ委員「私はやっぱり触れる機会を増やすということが大事だと思うのだが、資料6-1に書いてあるように「どこで」という場所を考えたときに、母語教室とかをどんどん増やすというのは難しいとっていて、そうではなくて、たとえば週がわりで各国の紹介とかをするサークルみたいなのがあってそこに子どもたちが来て、たとえばその国がマレーシアだったときにはマレーシアの国籍の子どもたちが前に出られるような、そういうかたちで触れる機会というのを増やすことがよいのではないかと思う。」

園田部会長「提言に向けてはこれからみんなアイデアを交換すると思うが、まだ審議テーマが残っているのでほかに意見がなければ、ひとまず次のテーマに移りたい。（異議なし）それでは、高校進学について、まずは資料説明から願います。」

（事務局高橋専門調査員が資料6-2に基づき説明。）

園田部会長「みなさんはまだお子さんが小さいので、実際に高校受験で苦労した経験があるのは私と牟さんくらいかもしれないが、本当に大切なことなのでみな

さんにも知ってほしい。子どもが外国人でも日本語が得意であれば大丈夫と考えるかもしれないが、親がサポートしてあげないと子どもは本当に迷ってしまう。だから、高校受験に関して親の知識や情報というのも大事だ。

在県枠に関しては、3年以内というのはやはり厳しすぎる。結果的に定時制に行くか、私立に行くかという選択になることが多いが、私立に行くためには膨大なお金がかかる。高校進学に関する問題の全部を提言にすることは難しいが、個人的には在県枠を増やすとか条件を3年以内から5年以内にするといったことなら、提言にできるのではないかと思う。」

事務局高橋専門調査員「このテーマに関して正直リアリティがないという方はどのくらいいるか。というのも、オープン会議で提案されたわけだが、現場や研究者からはよく指摘される問題だ。だが、自分が直接経験したり、関わっていないと大変さがよくわからないと思う。一方で、実際の中学生や高校生ではこの会議に参加できないので、みなさんがその子たちの声を聞いて、かわりに代弁するということはみなさんに期待されている役割のひとつではないかと思う。今の時点ではやはりみなさんにとっては自分と遠いテーマという印象なのだろうか。」

劉委員「遠い。可能なら何人か実際に苦労を経験した人に会議に来てもらって話聞けるとよいのだが、正直、よくわかっていない。」

ヘイ委員「私は、在県枠は使わずに一般枠で高校に入ったのだが、在県枠で入った子たちも知っている。私が知っている子たちは、受験の前に語学学校などに通っていたりしたので入ってからは大きな問題もなく授業を受けていた。在県枠を増やしてほしいということもわかるが、入ってからのことを考えると無暗に増やせばよいということでもない気はする。入ってから言語的なレベルが追いつかない子にはサポートする体制が必要だ。」

園田部会長「ただ増やせばよいというわけではないし、サポートの体制も必要だ。ただ、高校に進学できない子どもたちは居場所がなくなってしまうし、将来にも大きな影響を与えることになってしまう。私としては教育委員会の人に参考人に来てもらえるとよいのではないかと思う。」

事務局高橋専門調査員「ここで大きな問題になっているのは、日本で生まれ育った子どもというよりも、小学校の高学年や中学校になってから呼び寄せられてきた子どもたちで、その子たちはまったく日本語が話せない状態で来日したりする。そうすると、いくらがんばっても、受験までに日本語の学習言語を身につ

けることは難しい。その子たちが高校に行けないとどうなってしまふのかと
いうことを考える必要がある。」

園田部会長「今、説明にあったように本当に難しいし、怖い問題だ。やはり学校は
ひとつの居場所なので、その子たちが学校に入れないと居場所がなくて非行に
走ってしまう可能性も高いと思う。ただ、今日はもう時間がないので続きは
次回にしたい。それでは、フィールドワークについて資料の説明をお願いす
る。」

(事務局高橋専門調査員が参考資料に基づき説明。)

園田部会長「私はプラザができてからなのでもう8年そこにいる。本当に小さな
プラザなのだが、少しでも、何人かの外国人の方や青少年に何かサポートして
あげられればという想いである場所がある。まだまだ知らない人もいるのだが、
8年かけてようやく今のような状態までくることができた。みなさんは行って
みてどのように感じたか。」

河本委員「すごくよい場所だと思った。駅から近いので、雨の日でもすぐに行ける。
PRをすればもっと利用者が増えると思う。」

仲田委員「さっき話した母語とか母文化とかもそうだが、プラザのような場所があれ
ばいろいろなことが全部1つの場所で実現できるのではないかと思った。」

河本委員「私もそう思った。」

牟委員「とても落ちつく感じがしてよかった。自分が子育てで苦労していたころにこ
んな場所があったら、相談できる相手がいてよかったなと思った。今、子育て
をしている若い人のためにぜひあんな場所があったらよいと思う。」

ケゼンダア委員「私もよいところだと思った。みなさんがいろいろとおっしゃった
ことに加えて、資料や情報が充実していると感じた。区役所とか市役所でもら
えそうな資料でも、なおかつ、いろいろな言語の資料があって、それが非常に
よいと思った。社会生活部会では区役所にワンストップ窓口がほしいという
意見もあるようだが、そういう正式なところへ行かなくても、プラザに行けば
いろいろな資料がもらえるので非常によかった。」

園田部会長「資料は、常にアップデートしている。いっぱいある情報を、毎週私た
ちがチェックして、古いものは捨てるということをスタッフの大切な仕事とし
てやっている。情報に関しては、そういったことを徹底的にしないと意味がな
い。」

金委員「当日も話したのだが、10代の子どもたちがお金を使わなくてもいいと

いうのはすごく魅力的で、川崎だとやはり商業施設の中しか居場所がない。でも、みんな勉強したり、使った後の片づけも自然としたりしてとても感心した。

傾聴活動を『何となくという感じで話しているんだ』というふうに言っていたが、そんなことは絶対ないと思う。そんなに簡単にできるものではないと思う。やはり自分自身のことを振り返ったときに、親でも、先生でも、役所の職員でも、警察官でもない人で、信頼して話ができる大人の相手というのはいなかった。プラザのスタッフのような、自然に話を聞いてくれる人がいてくれたら本当によかったなと思った。難しいと思うが、権力関係のない信頼できる大人の存在は本当に重要だと思う。」

劉委員「よいところはみなさんがたくさん話したので、私はその先の課題について意見を言いたい。1つ目は、情報提供が充実しているのは外国人支援と青少年という2つのテーマに絞った施設だからだと思う。情報量自体は川崎市も決して少なくはないのではないかと私は思う。要は情報を集約して整理することが必要だと思う。2つ目は、規模だ。あまり大きすぎてもダメだと思う。3つ目は、運営の体制だ。川崎市のように指定管理ではなく、運営委託というのがポイントになっていると思う。責任をもって運営できる団体がある程度自分たちのアイデアも反映するかたちで主体的に運営することが大切だと思う。役所のように職員が2年で交代してしまうのも問題だと思う。」

園田部会長「川崎市は縦に長い地域なので、どこに置くかということも重要なポイントになるだろう。でも、大きくて新しい場所ではなくても、とりあえずそういった場所があるということが重要だ。」

河本委員「たしかに、まずははじめること、そしてそのつながりを大きくしていくことが大事だと思う。」

バルトコバ委員「すごく理想的な場所で、小さくてもよいので川崎にも欲しいと思った。私も学生のために狭い部屋に帰りたくなくて、専門学校で自習室を利用していたが周りは日本人しかいなかった。もし私と同じように困っている外国人がいたら、お互いに助け合ったり、いろいろな交流がはじまったりできたかなと思う。」

園田部会長「それでは時間になったので、次回のことについて事務局から連絡をお願いする。」

(事務局高橋専門調査員が次回の部会について説明。必要な資料の確認。)

園田部会長「それでは、次回は最初に少し今日の続きの審議をして、そのあと振り返りをはじめよう。」

【社会生活部会】

任部会長「それでは社会生活部会をはじめます。今日は区役所サービス、相談窓口、情報伝達という3つのテーマについて審議する予定だ。時間があまりないので、それぞれ15分から20分くらいで審議したい。まずは区役所サービスについて。前回、シフケンさんが1つの窓口で全部解決してくれるワンストップ窓口という意見を出してくれたのだが、みなさんのなかでのワンストップ窓口というもののイメージが同じではないように感じた。というのも、1つの窓口でいろいろな手続きができるという意味とそれぞれの窓口を案内してくれる案内の窓口という意味の2つがあるように感じた。」

シフケン委員「日本語があまりできなくて、さらに窓口の場所もよくわからないというになると困ると思うので、手続きを1か所にまとめた方がよいと思う。あとは、区ごとにサービスが違くなならないようにすることも大事だと思う。」

ディットマー委員「業務的な面で考えると、いろいろな手続きがあるので1つの窓口ですべての手続きをするのは難しいのではないかと。それぞれの手続きと窓口を説明してくれる簡単な資料があれば手続きがスムーズに進むと思う。外国人だけではなくて、日本人にとっても便利な窓口になるとよい。案内窓口はあるが、その機能を充実させてほしい。」

任部会長「私が思ったのは、みなさん、それぞれ違う目的で区役所に行くので、1つの窓口でその全部に対応することは難しいと思う。わからなくて聞いたときに丁寧に教えてくれる窓口があればよいと思う。」

葉委員「手続きの窓口を1か所にした方が効率的だという意見なのだと理解しているが、個人的には区役所のなかだけで完結できるのでそれほど大変ではないと思う。全部の手続きを1か所にまとめたなら、別の問題がでてきてしまうのではないかとおもう。」

タカハシ委員「私の経験は川崎区のものなので、ほかの区についてはわからないが川崎区では市民カードがあれば行政サービス端末を使っていろいろな書類を手に入れることができる。たとえば、その端末をもっと増やして利用を促進すればよいのではないかと。あとは、端末では出せない書類だけ案内する情報があればよい。」

任部会長「私も知っているが、たしか利用できるのは夜の8時までだったと思う。」

タカハシ委員「24時間になるとよいと思う。」

任部会長「一旦ここでまとめようと思う。第9期でウェルカムセットという提言も出たが、やはり窓口でいろいろな情報を提供してくれることは大事だと思う。窓口の具体的な提案としては時間の延長や端末の活用といった意見もあった。転入した時の手続きについては、T o D oリストのようなものがあると便利という意見もあった。ひとまず、区役所サービスとしてはこのようなまとめで、次のテーマの相談窓口に移りたい。」

デイトマー委員「私のなかでは、ワンストップの窓口と相談窓口は同じようなイメージなのだが。」

孔委員「私も区役所のサービスと相談窓口は関連することではないかと思うので、一緒に話した方がよいのではないか。」

ヴィラマー委員「外国人の場合には言葉の壁があると思うので、できたら英語でよいので対応してくれるとよい。時間も日本語が話せる私たちは5時までは仕事していることが多いので、もう少し延長してほしい。」

任部会長「理想をいえば24時間対応にしてほしいということか。」

デイトマー委員「たしかに24時間対応というのはすごく理想的だが、そこで働く人も同じ人間なので難しいのではないか。何でもかんでもコンビニ化するというのもどうか。日本人も同じように市役所が開いている時間帯に行かなければいけないわけだから、市の職員が働ける範囲で考えるべきなのではないか。」

グエン委員「高津区役所は第2、第4土曜日の午前中、12時半までやっている。ほかにも行政サービスコーナーがマルイの下にあるので、大体の手続きはそこを利用すればできる。すごく便利で、十分に対応できるのではないかと思う。」

張委員「先ほどのシフケンさんの話を聞いて、同じ川崎市なのに区によってサービスが違うのは問題だと思う。先ほどリンさんが言っていたように、高津区だったら土曜日もやっているし、マルイの下でもやっている。同じ川崎市なのだから統一してほしい。」

デイトマー委員「高津区だけではなくて、多摩区でも土曜日にやっている。登戸駅にも行政情報コーナーはある。他の区でもあるのではないか。」

任部会長「やはりサービスは充実しているが、知らない人が多いというのが現状なのだろう。相談窓口というテーマだったが、ここで一旦区切って情報伝達のテーマに移りたい。」

張委員「要するに情報が届いていない。もっとホームページで検索しやすいようにして、自分が欲しい情報が簡単に入手できるようにしてほしい。」

グエン委員「みんな、情報伝達についていろいろ意見を言っているが、私としては情報は十分にある。みんなは何をそこまで求めているのか。私は仕事が忙しいので土曜日以外は市役所へ行けないのだが、『他に何かないですか』と聞いたら、行政サービスセンターがあることを案内してくれた。みんなは困っているときにそうやって聞いたりしていないのか。聞けば親切に教えてくれる。中原も高津も宮前も行ったことがあるが、どこの窓口も親切に教えてくれた。聞いたり調べたりせずに家にいるだけで、『情報を届けてくれない』『知らなかった』というのは自分が悪いのではないか。」

ディットマー委員「私も全く同じ意見だが、たとえば困っている人が誰に聞けばいいのかわからないということはあると思う。そういった意味で困ったときに聞くための窓口が明確にあればよいと思う。」

グエン委員「言いたいことはよくわかったが、区役所にはすでに総合案内窓口がある。さらに新しい窓口をつくってほしいということか。」

オルソン副委員長「ひとつ考えなければいけないのは、われわれは日本語が話せるので、総合案内の窓口で相談することができるが、相談できない人もいる。情報伝達に関しては、資料にもある通りインターネットと知り合いからの口コミというのが重要だということが調査の結果からもわかる。やはりインターネットが充実していることは必要だと思う。それと、口コミに関しては横浜のラウンジにフィールドワークに行った人たちの評判がすごくよい。そういった場所があると、困っている人が相談に行くだけではなくて、遊びに行くと知り合いができたりすると、もっと情報がまわるようになる。」

任部会長「情報伝達についてまだ話したいことはあると思うが、時間がないので次回に持ち越しにしたい。次回、事務局に準備してもらった資料のリクエストをあげてほしい。」

シブケン委員「川崎市では、どういうものをインターネットに載せているのか、どういう許可が必要なのか、私たちがアイデアを考えるためにもそういったルールやプロセスについての情報がほしい。」

事務局町田課長「ホームページは一律に広報課というところで管理、統括している。

個別の情報はそれぞれの所管でつくっていて、それぞれの所管の責任者が承認してアップするという事になっている。」

河委員「個人情報とかもあるとは思いますが、外国人相談窓口で実際にどういった案件の相談があるのかということを知る範囲で知りたい。」

任部会長「ほかに追加資料があれば事務局まで連絡を。それでは社会生活部会を終わりにする。」

【全体会】

セヌー委員長「全体会を再開する。まずは部会報告を福祉教育部会からお願いする。」

園田部会長「今日は部会審議の時間が短かったが、主に母語・母文化について審議した。母語や母文化については、本当に子どもが学びたいのか、それとも親が学んでほしいと思っているだけなのかということがひとつのポイントだ。親の考えを子どもに押しつけるのではなく、子どもが学びたいと思ったときにサポートするというのがよいのではないかという意見が多かった。オープン会議で出た高校進学については、今日は資料を確認するだけで審議はできなかった。ただ、やはり大きな問題としては日常で話す言葉と勉強で使う言葉は別で、学習言語を身につけるには少なくとも5年、場合によっては10年以上かかるかもしれないということがある。次回また審議することにしたい。あとは、先日、つづきMYプラザにフィールドワークに行った感想や意見を少し話した。」

セヌー委員長「福祉教育部会から何か補足はあるか。（なし）では、社会生活部会から何か質問や意見はあるか。（なし）では次に社会生活の報告をお願いする。」

任部会長「今回は3つのテーマについて話した。区役所のサービス、相談窓口と情報伝達だ。まず区役所のサービスについては、ワンストップの窓口があったらよいという意見があった。具体的には次にどこに行けばよいのかを教えてくださいという窓口があるとよいということになった。それと、ダニエラさんから転入したときにリストのようなものがもらえるとよいという意見があった。相談窓口については、仕事をしていると窓口の開いている時間に行けないという意見があった。実際には、各区に行政サービスコーナーがあり、土曜日

にもやっていたりする。ニーズはあると思うが、コストについても考えなければいけない。情報伝達は時間が足りなくて終わらなかった。」

セヌー委員長「社会生活部会から補足はあるか。(なし)福祉教育部会からの質問や意見はあるか。(なし)それでは、今日の議事はすべて終了した。事務局から事務連絡をお願いする。」

事務局須藤課長補佐「外国人市民意識実態調査の報告書ができた。今日は概要版をお配りしたが、報告書がほしいという人は事務局に連絡をしてほしい。市のホームページからみることもできる。」

事務局高橋専門調査員「先ほど、全体会が再開する前に提言の評価についてという資料をお配った。次回の会議で使う資料で、正副委員長部会長会議でなるべく早く資料を用意してほしいという要望があったので配った。」

孔委員「お知らせをしたい。今年2月に私と仲田シリワンさんが参加したDST上映会というチラシをみなさんに配ったと思うが、すごく評判がよかったので5月17日と5月24日にまた上映会をすることになった。今回のテーマが教育で、外国人が日本で自分の子どもを育てるときの教育について、たくさんの方が自分の経験を語ったりしている。福祉教育部会での子どもの教育の議論にも参考になるのではないかと思う。」

セヌー委員長「次回の会議は5月24日の日曜日、午後2時から国際交流センターで開催する。これで2015年度第1回第1日の会議を終わりにする。お疲れさまでした。」